

所 陵

No. 72

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



木葉猿

● 目 次 ●

ロンドンの博物館を巡って（2） ～そぞろ歩いて～	池田 勝彦	2
檜葉の神輿	黒田 一充	6
本山彦一生誕の地 熊本市を訪ねて	文珠 省三	10
関西大学と盾塚・鞍塚・珠金塚古墳	藤井 陽輔	14

関西大学博物館

〒 564-8680 大阪府吹田市山手町 3 丁目 3 番 35 号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

ロンドンの博物館を巡って（２） ～そぞろ歩いて～

池 田 勝 彦

昨年（2014～2015）ケンジントン地区にある博物館をいくつか実際に訪問して、博物館の「今」を書かせていただいた。「今年も書かせろ」という著者の強硬な姿勢に博物館事務局の方々も仕方なく依頼を送られたと拝察している。それを受け取った著者は我に返って強く後悔をしているところである。「さて、どこの博物館を書こう」、「何にも浮かんでこない」、「これは困った」という状況である。前回の最後に「コベントガーデン辺り」などと書いてあったが、それも含めて考えているが、今ここの部分を書いている時点では「どこの博物館へ」は決まっていない（12月27日）。飛行機のなかで少し考えてみようと思っているところである。博物館だけでなく「美術館」も入ってくるかもしれないが、お許しいただければと思っている。

「行きの機内では何も浮かばなかった」といえば聞こえはよいが、何も考えなかったというのが正しいようである。今、マール・アーチ近くのホテルの部屋で、どうしようと悩んでいるが、なぜか行動に移ってこないのが困りものである。12月30日 午前10時30分である。外はいつものごとく厚い雲に覆われた重苦しさが漂っている。しかし、街は隣国のテロにも関係なく賑わっている。昨年以上に多いように感じている。しかし昨年と比べて警官さんが非常に多いとも感じている。チューブにも交通機関を専門に警備する警官さんが二人で乗ってきていた。ミュージカルの劇場もまた大きい荷物に関しては中身の確認をしている（どこかでテロがあると始めるようである）。

ようやく訪問する博物館が決まったのが12月31日の朝である。昨年（2014年）は長蛇の列で諦めた自然史博物館（Natural History Museum, NHM）とした。開館時間がわかっていなかったが、まあ10時頃だと考え、TubeのCentralに乗り、Notting Hill GateでCircleに乗り換えてSouth Kensingtonで下車した。この駅はImperial Collegeの最寄り駅なので、在外研究

期間は毎日下車した駅である。在外から20年経ってもほとんど何も変わっていない。いつ来ても「帰ってきた」と感じる場所である。

そこから地下道（Subway）で少し歩くと、NHMがある。昨年同様にスケートリンクが設置されていた（写真1）。Cromwell Roadにメインエントランスがあるが、Exhibition Road側がよいという係員の説明に乗って、そちらから入場することにした。10時過ぎにNHMに着いたが、今年もすでに多くの人が入場待ちで並んでいた（写真2）。約30分待ちという、比較的短い待ち時間で入場できた。もちろん今回もAdmission freeの博物館である。今回メインエ



写真1 自然史博物館の中庭に設置されたスケートリンク



写真2 自然史博物館への入場を待つ人々



写真3 出迎えてくれた恐竜（の骨）

ントランスから入場しなかったために、有名な恐竜（の骨）の展示会場でなく、地球に関わる展示場から始めることとなった。それでも恐竜（の骨）の展示で出迎えていただいたが（写真3）。地球の生き立ちを地学的（地球物理学的）な立場と生物学的（人類誕生についても含まれている）な立場で、時間軸であらわす展示は興味深いものであった。地球に関わることであるので、火山や地震（プレート移動を含めた）の展示にも力を入れていた。阪神・淡路大震災に関する展示はコンビニエンスストア（表示は神戸スーパーマーケット）のような陳列棚を作り、その床面が揺れるという比較的規模の大きい経験型の展示を行っていた（写真4、5）。また、東日本大震災については、「津波」というテーマで取り上げ、そのニュース映像を流している。さらに、発生時間に止まった時計（写真6）も展示している。「生々しい」ものの展示ではあるが、見学者を見ると体験者でないからやはりピンときていないように思えてしまう。次は鳥やCreepy Crawlies（気持ち悪いはい回るもの、ムカデなど）、さらに海に生息する爬虫類の展示となる。あまり気持ちのよいものではなかった。さらに、同ゾーンで鉱物と宝石の展示がある。金属系の研究者にとっては「鉱物」はお友達感覚なので、展示も期待したが、期待以上ではなかったというのが正直なところである。したがって写真に収めるものでもなかった。

次にメインエントランスのゾーンになった。入り口にドーンとディプロドクス（の骨）の展示がある（写真7）。それを見下ろすようにチャールズ・ダーウィンの白い大理石座像がある

（写真8）。ダーウィンがここに座して、今何を思っているか知りたい気もする。

エコロジーに関する展示もあり、3R (Reduce, Reuse and Recycle) の具体的な行動についても展示があった。これはとても分かりやすかつ



写真4 地震体験施設の表示「神戸スーパーマーケット」



写真5 地震体験施設に展示されているマーケット商品



写真6 東日本大震災の津波で被災した家の時計とカレンダー



写真7 メイン・エントランスでお迎えするディプロドクス



写真9 NHMの外観（2014年と同じ）



写真8 入場者を見下ろすダーウィン

たので、本学の理工学系に展示場ができるとすれば、展示したい内容である。海で行われている壮大なリサイクルシステム、植物の葉で行われている光合成や食物連鎖なども比較的わかりやすく展示されていた。

日本にも多くの自然史博物館があり、大阪市にも長居公園内にあるようである。本訪問記の著者は日本の自然史博物館を訪問したことがないので、ロンドンのNHM（写真9）と比較できる能力はない。日本でも「よい展示」が行われていると思うが、やはり無料入場を心がける必要があるかと思う。訪問者の寄付に期待して行ってみては！

「コベントガーデン辺り」には「ロンドン交通博物館」がある。Admission Feeは16ポンド

と安くない。SHOPには入ったが、博物館施設には入場していない。コベントガーデンに今回行くことにしたその理由はROYAL OPERA HOUSEに行くためである。一応OPERAを観るという目的である。今回の訪問記の趣旨とは異なるので、内容を詳細に記述することは避けるが、建造物としてはとてもよいので、博物館・美術館感覚で訪れることをお勧めする。OPERAはTicket Feeが高いので、BALLETをお勧めする。Christmas SeasonであるとThe Nutcrackerが上演されていることが多い。子供が耐えられる最長時間の90分の作品なので特におすすめである。お時間に余裕にない方は2幕のみ（30分程度？）でも十分に楽しめる（この作品で聴くべき曲は2幕に集中しているのだ）。

今回は博物館が一か所で、美術館を回ることもできなかったのもので、博物館でも美術館でもないが、建物自体が博物館か美術館に展示される価値があると思われるものとしてThe Ritz Londonも紹介したいと思う。The Ritzはパリ（セザール・リッツ創業の1号店）とロンドン、マドリードの3か所しかない伝統的なホテルであることはご承知であろう。現在、マリオット・インターナショナルの傘下にあるRitz-Carlton Hotelとは別物ものである。創業が1907年5月24日で、グリーン・パークの横に建っている。建物内の歴史と高級感を感じることができる。壁はすべて白を基調とし、金色で装飾がなされている。ただし、現在のホテルとしての機能は皆無で、車いすなどで移動することがとても難しく、その旨はホテル自身公表している。特に

クリスマスシーズンはきらびやかで、日本では見かけることができない雰囲気を感じることができる。部屋も白を基調に、金色の装飾は変わらない（写真10、11、スーツケースが邪魔で申し訳ございません）。ファイアー・プレイスもあり、照明も豪奢である。今回はバスルームに段差がなかったが、部屋によってはバスルームに段差があることもある。趣味で泊まるにはよいが、一般向けのホテルではないように思う。これでは営業妨害となるかもしれないので少し補足しておく。19世紀末から20世紀初頭のヨーロッパの歴史に触れることのできる建物ではある。

2015年と2016年の2年続けてロンドン博物館訪問記を書かせていただいた。では2017年であるが、2016年の年末にロンドンを訪れるかどうかかわからないというのが正直なところである。1995年の在外から2016年まで20年間に亘ってロ

ンドンの定点測定をしてきたが、「もうよいか」という気がしてきている。ロンドンの雰囲気も変化してきており、それ以上に著者自身が変わってきているのであろう。何が違ってきているかをこの1年間熟考して、答えが出たときに、再度訪問するかどうか決まるように思う。もし訪問するとなればまた書かせていただければと思っている。ただ、事務局も読者の方々も「レッドカード」を高々と掲げているように思えるが…？

博物館運営委員 化学生命工学部教授



写真10 ザ・リッツ ロンドンの室内
(ファイアープレイス)



写真11 ザ・リッツ ロンドンの室内
(リビング)

檜葉の神輿

黒田 一 充

神社では、祭りの日に神が旅をすると考えられ、祭神の乗り物として神輿が担がれる。神輿は精巧な木彫が施され、漆や金箔などの豪華な装飾で飾られた人目を引く存在である。神輿の数は、祭神の数だけ出るところもあるが、1基か子ども神輿を加えた大小2基のところも多い。しかし江戸の町では、神社の神輿とは別に、町内ごとに神輿を出して祭りに参加した。

現在も東京都千代田区の神田明神では、2年に一度の神田祭の本祭りに氏子区域の108の町内から大小200を越える神輿が出され、その豪華さが競われる（写真1）。祭りの当日の宮入りでは、神田明神の境内に各町の神輿が順番に担ぎ込まれて終日にぎわう。



写真1 神田祭の神輿の宮入り（2013年）

このような豪華な装飾をした神輿は、平安時代後期には現れていたようである。『平家物語』（御輿振）には、安元3年（1177）4月に延暦寺の僧兵たちが日吉社の神輿を担いで強訴をした記事があり、「御神宝天に輝いて、日月地に落ち給ふかと驚かる」として、神輿が装飾で輝いていた記述がある。同じころに制作された『年中行事絵巻』（巻9）にも、四面に鏡や飾りを吊した祇園御霊会の神輿が描かれている。

しかし、神輿のことを記した初期の史料では、それほど豪華な飾りはなかった。天慶8年（945）7月には、志多羅神などをまつた神輿3基が群集とともに平安京に近づいてきたとする『本朝世紀』の記録がある。3基の神輿のうち、1基

は檜皮^{ひわだ}で屋根を葺き、側面に鳥居^{ひば}の飾りがあったが、他の2基は檜葉で葺いて鳥居がないものだったと記している。数日後に神輿の数は6基に増えたようだが、檜皮葺きに対して檜葉を葺いた神輿は、いかにも急ごしらえの印象を受ける。

同書や『日本紀略』の正暦5年（994）6月27日条に、平安宮の北にある船岡山で行われた御霊会の記事がある。疫神を鎮めるため、木工寮修理職が2基の神輿をつくって安置し、多数の人が参加して祭りが行われ、その翌日には難波の海へ流すために神輿は運ばれたという。一日だけで海に流すため、それほど豪華な装飾の必要はなかったと思われる。

このような簡素なつくりの神輿は、その後もつくられたことが史料に見える。京都・松尾社の4月の祭りでは、6基の神輿が西七条の旅所に運ばれたが、貞享2年（1685）の『日次紀事』には、別の神輿のことも記している。

西七条の旅所の近くにあった武御前の神輿を毎年白木でつくって桂川の東岸に棄て、翌日児童がこれを昇いて壊し、その木片を厠に挿しておくことと疫病を祓うことができたという。文化3年（1806）の『諸国図会年中行事大成』では、この狭神輿^{さかみ}は棄てられず、棄てるまねだけして旅所に持ち帰るようになっており、「寝ほれの御前」とよばれていたという。川に棄てるのは疫神などを追い出す行為であり、棄てて壊すため簡素なつくりの神輿だったのだろう。



写真2 下飯田町の杉葉の神輿（2008年）

現代でも、川などに棄てるための神輿がある。浜松市南区下飯田町・六所神社では、8月の祇園祭に杉葉の神輿をつくる。神輿は90センチメートル四方の大きさで、屋根の棟の両端は角のように上がり、その先端までの高さも約90センチメートルである。祭りの日には「ヨイトー、モイトー」と唱えながら子どもたちが担いで地区内を廻り、若衆たちが集落の東側を流れる安間川に流していた。後には焼却して灰を川に流すようになり、現在は1年間神社でまつっておき、翌年に新しい神輿をつくった後、燃やしている（写真2）。

千葉県袖ヶ浦市野田では、7月31日に虫送りが行われる。午前中に野田神社の境内で、大人たちが竹で円錐形の骨組みをつくり、中心の竹に御幣を付ける。周囲を檜葉で覆って頂上に藁と竹の皮でつくった鳳凰を載せる（写真3）。神輿が完成するお昼ごろになると、子どもたちが集まってくる。昔は男の子だけの行事だったが、今は女の子も参加する。

神輿を御神酒で清めた後に子どもたちが担ぎ、御幣を付けた女竹を持った子どもを先頭に「ワッショイ、豊年」と叫びながら地区内の各家を廻る。家の前では「わーい」と叫んで神輿を上下に揺らした後、祝儀やお菓子などをもらう。女竹は途中、3か所の水田の水口に挿していく。夕方、集落内のすべての家を廻ると、集落の外れにある野田堰というため池に神輿を棄てて、稲につく害虫を追い出す。虫送りに藁人形などを使うところは多いが、神輿で行うところは珍しい。

茨城県では、旧暦6月に青屋箸といって、ススキの箸でうどんを食べる民俗があった。石岡市総社の青屋神社では、ススキで小祠の屋根を葺く青屋祭が行われている。小美玉市・立延地区の7月の青屋祭でも、子どもたちがススキを刈って各家に配るが、別に青竹を骨組みにし、周りを茅で覆った小屋をつくっていた。完成すると内部に御幣をまつり、田んぼの中を担いでいく。集落を流れる園部川に着くと「お精進」という場所で神輿を流した。子どもが集まる



写真3 野田の虫送り（2015年）

儀礼は続いているようだが、茅の小屋はつくらなくなったとのことである。これも、虫送りの儀礼だと考えられる。

千葉県八千代市吉橋でも、1月下旬の大杉様の行事で子どもたちが青竹と杉葉でつくった神輿を担ぎ、「あんば大杉大明神、悪魔を祓ってヨーヤイヤサ」と唱えながら各家を廻り、大杉神社に納めていたが、現在は行われていない。いずれも疫神などを神輿に集め、祭りの後に壊したり棄てたりすることに意味がある。

それらとは別の、祭神を乗せて氏子地区を廻る神輿も見ていきたい。

愛媛県宇和島市吉田町知永の門島神社では、毎年10月の祭りにシダ神輿がつくられる。シダ神輿は、太い青竹を芯にしてウラジロで鳳凰をかたどった高さ150センチメートルほどのものである。下部に注連を巻いてあり、体内に大きな鈴を吊しているため、揺らすと大きな音が鳴る。



写真4 知永のシダ神輿（2008年）

午前中に大人たちも手伝ってつくり、午後から、小中学生たちが牛鬼とシダ神輿を担いで地区内の全戸を廻る。牛鬼は、青竹の先に面を着け、赤い布を胴体になっている。各家では、まず牛鬼が玄関口から中へ「ウェーウェーウェー」といいながら3回首をつっこむ。その後、「ヤーヤーヤーヤー、ヤー」という掛け声とともに背後でシダ神輿を大きく上下に揺らす。付添う方にうかがうと、昔の神輿はもっと大きく、数も2基だったという（写真4）。

愛媛県にはもう1か所、植物でつくる神輿がある。今治市神宮の野間神社では、10月の秋祭りの前に、稲藁でつくった藁神輿を子どもたちが担いで氏子の地区を廻る。高さは約85センチメートルで、2枚の羽と12本の尾を持つ鳳凰を飾り、背中に御幣を付けた榊の枝を挿している。かつては氏子地区ごとにつくっていたようだが、今は使い回しており、藁神輿を担ぐ子どもたちも7つの氏子地区全体から集まってくる。

藁神輿を担ぐのは連日ではなく、10月に入った7日間の日程で行われる。一日ずつひとつの集落内の家を廻ってお菓子をもらい、最後に神社に運んで楼門のところに置いて帰る（写真5）。次の地区の日になると、子どもたちが神社に取りに来て、同じように地区内を担いで廻って神社に戻る。春祭りに子ども神輿がなかったため、現在は春にも藁神輿がつくられている。

滋賀県大津市仰木（下仰木）の八坂神社では、8月15日の祭りに笹神輿が出る。祭神が牛頭天王であるため、農耕用の牛が病気にならないよう祈る祭りで、牛を飼っている農家が青竹を1本ずつ奉納し、それを材料にして笹神輿をつくったという。その後、牛を飼う家がなくなって行事自体も中断していたものが復活されている。



写真5 神宮の藁神輿（2014年）

祭りの前日に神輿をつくる。青竹の担ぎ棒の中央に約1メートル四方の土台を組み、その上に青竹で四角錐の骨組みを組み立てる。骨組みができると笹で覆い、頂上に御幣を挿し、全体を花で飾る。大きさは高さ1メートルぐらいだが、昔は祭神にあわせて大中小の3基の笹神輿がつくられたという。

祭りは昼前に神事があり、その後集まった地区の人たちの行列が出発する。太鼓を先頭に、子どもたちが笹神輿を担ぎ、その後ろに御幣を付けた榊の大枝が進む。大枝は、根元ではなく、葉の茂った方を前にし、紐をくくり付けて地面を引きずっていく。この大枝は、牛を表すのだ



写真6 下仰木の笹神輿（2015年）



写真7 味見河内町の柴神輿（2007年）

という。1時間ほどで地区内を一周し、神社に戻ると餅撒きをして解散する（写真6）。神輿はその日の午後に解体する。

これらはいずれも子どもたちが担ぐ神輿であるが、大人が担ぐ神輿にも植物の葉でつくるものがある。

福井市味見河内町の住吉神社で5月5日に行われるじじくれ祭りには、柴神輿が出る。早朝から準備が始まり、青竹を井桁に組んで杉葉や椿の枝などを角形に結んで台座をつくり、その上にブナの葉やシデの葉をさしこむ。神輿の中央には神社の祭神3神の御神体を表すショウブ・コブシ・ヤマブキの花を立てる。

完成すると拝殿で神酒を掛けて祝詞をあげ、法被姿の若者たちが担ぎ、最初に両手で差し上げてくるくる回った後、境内に飛び出し、そのまま神歌を唱いながら集落へ駆けていく（写真7）。くるくる回るのは、神輿に祭神を下ろす所作だと思われる。集落内を廻って神社に帰ってくると、待ち受けていた人びとが集まってきて神輿を壊して御神体の花を奪い合う。かつては子ども神輿もあったようで、春の訪れを祝う祭りだという。

神輿が毎年つくられなくなる過渡期の様子を伝えるものもある。

福岡県香春町採銅所は香春岳の北麓の地で、古くから付近で銅が採掘された。大分県の宇佐八幡宮の放生会に銅鏡を納めた場所として、八幡信仰と関係が深い。この地にある古宮八幡神社は、香春岳をまつる香春神社の元宮こみやだとする伝承があり、明治時代まではこの神社の神輿が香春神社まで運ばれた。現在4月下旬の祭りでは、神輿が境内から下ろされ、古宮音頭（伊勢音頭）を唱いながら地区内を廻った後、神社の



写真8 古宮八幡神社の杉葉の神輿（2015年）

石段下にある御旅所で一泊する。

この神輿は、屋根が5段になっており、毎年杉葉で新しく葺くのが特徴である（写真8）。御旅所の近くには、神社から下りてくる神輿を迎えるために、さまざまな色の紙をつかったバレンで飾られた5つの氏子地区の子ども山笠が集まってくるが、その屋根も杉葉で葺いている（写真9）。『香春町史』によると、杉葉の神輿は、中断していた香春神社の神幸祭が再興された宝暦6年（1756）の記録までしかさかのぼることはできないが、それ以前の古い姿を残している。

檜葉・杉葉・シダなど種類は異なるが、植物の葉でつくったこれらの神輿の事例は、豪華さを競った神輿以外に、祭りのたびに新しくつくり、祭りが終わると壊す神輿もあったことを伝えている。毎年新しい植物で神輿をつくり、葉が枯れる前の色鮮やかなうちに祭りを行うことが、神聖な乗り物として重要だったのである。



写真9 杉葉で葺いた子ども山笠（2015年）

本山彦一生誕の地 熊本市を訪ねて

文 珠 省 三

はじめに

今回、熊本市を訪問した理由は、まず、本山彦一が生まれた地元、熊本市立碩台小学校において「本山彦一を顕彰する会」が開催されること。そして、その実行委員会より、本山彦一が収集した資料を所蔵する関西大学博物館へ、本山コレクション展示パネルの貸与依頼があり、それと併せて顕彰する会への職員派遣要請があったことによる。

本山彦一を顕彰する会

講師：上杉康彦氏（本山彦一曾孫）

主催：本山彦一を顕彰する会実行委員会
（熊本市立碩台小学校、碩台校区自治会連合会、毎日新聞社）

日時：平成27年11月20日（金）
午後2時50分～4時10分

会場：熊本市立碩台小学校体育館

併設：本山コレクションパネル展示

記されていないが、上杉氏の講演の前に、毎日新聞熊本支局長・大久保資宏氏、筆者によりそれぞれの関わりを中心に報告をおこなった。

まず、大久保氏により、本山彦一は、1883年（明治16年）東京の時事新報社に編集局総編輯として入社し、その後、会計局長になるが、その仕事は、新聞の販売拡張・論説執筆などもおこない、新聞社の経営に携わっていた。藤田組



写真1 本山彦一を顕彰する会 上杉康彦氏講演

支配人の仕事を続けながら新聞人としての経験を買われ、1889年（明治22年）に社務を統括する大阪毎日新聞社相談役、1903年（明治36年）には社長就任。その後、経済面を中心とした実業新聞から一般紙へと毎日新聞の転換を図った。

そして、東京へ進出、日刊紙『東京日日新聞』などを合併し、毎日新聞を日本を代表する全国紙へと発展させた。

また、「大阪毎日新聞慈善団」（現在の毎日新聞大阪社会事業団）を設立し、病院船による市民への医療提供、点字新聞「点字毎日」発行など社会事業にも関わっている。毎日新聞だけではなく、日本の新聞全体の近代化に非常に貢献した、ことなどを含め、毎日新聞社にかかわる業績を中心とした講演がおこなわれた。

筆者からは、重要文化財（2件16点）、登録有形文化財（18,495点）など本山コレクションの内容を紹介した。

考古学に深い関心を持ち、考古学・人類学・



写真2 本山コレクション展示パネル

歴史学の研究者を支援するとともに、「本山発掘隊（大毎考古隊）」を組織して、現在、国の史跡に指定されている大阪府藤井寺市国府遺跡、岡山県笠岡市津雲貝塚をはじめとした全国各地の遺跡を調査している。

また、海外では台湾台北市圓山貝塚や南米ペルーのサンニコラスでの発掘もおこなっている。あわせてその成果を新聞報道し、新聞社が文化財報道に力を入れるきっかけとなった、ことなど、文化面での功績を述べた。

上杉氏の講演は、本山彦一の生誕から始まり藤田組入社後の山陽鉄道などの鉄道事業、岡山県の児島湾干拓事業等の業績を述べるとともに、本山彦一の弟・一簣と家族のエピソードについて語られた。

本山彦一が租税寮を辞し、全国各地を巡る旅に出た、1878年（明治11年）頃、弟・一簣が加島屋（店主・廣岡信五郎 妻・廣岡浅子）に勤め、1887年（明治20年）前後に加島屋の北九州地区支配人として九州に赴任し炭鉱開発にかかわっている。小倉で急逝した一簣の遺児・二人の兄弟を本山彦一が養子として引き取っている。養子となった二人の兄弟の内、弟・本山勇太郎が、上杉康彦氏の実父で、その父から廣岡家での生活を思い出として聞かされている。

「中学校に入学してから加島屋に預けられ住み込み通学、炊きたてのご飯をたらふく食べ、きわめて愉快地に学生生活を送ったことなど、廣岡家での生活を樂しげに、たびたび語っていた」ことなど、話題の一つとした提供された。

特に干拓事業と鉄道事業がそれぞれ単独の事業ではなく、密接に結びついた国家的重要事業であったことを強調され、本山彦一が両事業を担当し、成し遂げたことを述べられていた。

顕彰会がおこなわれた熊本市立碩台小学校は元々本山家のあった場所で、その土地を本山彦一が熊本市に寄贈し、そこに碩台小学校が建てられている。現在、小学校正門を入ったところに本山彦一の記念碑が建っている。

この石碑は地元有志により建てられ、1932年（昭和7年）9月に本山彦一出席の下、除幕式がおこなわれた。碑文は、1929年（昭和4年）に大阪毎日新聞社に入社していた徳富蘇峰が担当している。その内容を、石碑横にある「記念碑の紹介」より抜粋して以下に紹介する。

石碑碑文

明治維新以来、熊本県は数多くの立派な人物を生み出していますが、本山彦一氏はその中でも特に優れた人物の一人です。子供の頃に志を立て、福沢諭吉先生（慶應大学の創設者）の教えを受け、年老いた親の世話をしながら学資を稼ぐために仕事にも励みました。その後、仕事を辞めて全国各地を視察し優れた人物との交流を重ねました。

視察を終えた本山氏は福沢先生の時事新報社に入社。さらに藤田組に支配人として入社し、岡山県の児島湾干拓の大事業を完成させました。その後、大阪毎日新聞と東京日日新聞、そして両社の合併で誕生した毎日新聞社の社長として我が国の文化に大きな貢献をしました。その結果、毎日新聞は世界的に高い評価を得ました。

また、本山氏は自費で富民協会を創設して産業を育て、慈善事業や考古博物などの研究にも貢献しました。数々の立派な仕事は広く国民に知られ、貴族院議員に選ばれるとともに勲二等が贈られました。

記念碑はこのような数多くの功績を残した本山氏をたたえ、後生に伝えようと、古里の有志が生誕地に建てることを決めました。碑文は本山氏を最も深く知る一人として、私（徳富蘇峰）が書くことになりました。

本山氏は嘉永6年（1853年）8月10日生まれ。80歳になる今も大変元気に仕事に打ち込んでいて、その姿は古里の人々の心を非常に奮い立たせています。

昭和7年5月 蘇峰 徳富 猪一郎撰



写真3 本山彦一翁記念碑

本山彦一の学業とその影響

生まれてから青年期までの本山彦一を観ると、熊本藩士・本山四郎作の長男として1853年（嘉永6年）8月10日、肥後国熊本城下（現在の熊本市中央区）に生れ、幼少期に太田黒塾（寺子屋）に学び、15歳頃には、細川藩へ出仕しながら、藩校・時習館へ通っている。廃藩置県後は上京し、蘭学者・箕作秋坪 主催の三叉学舎で学んでいる。

その後、東京では1874年（明治7年）11月から租税寮へ出仕しているが、暫くして福沢諭吉の知遇を得て、慶應義塾内の出版社に止宿し、諭吉に日常的に接する機会を得るなど、官吏としての業務を果たしつつ、慶應義塾門下生として学んでいる。

また、官吏として勤めながら『近事評論』『民間雑誌』等への評論発表、1878年（明治11年）初めに官吏辞任後、約半年間、全国各地を巡っているが、それで得た見聞を紀行文として雑誌・新聞へ掲載するなど、言論人としての片鱗をみせている。

1879年（明治12年）2月に兵庫県勸業課勤務、翌年には勸業学務課長（勸業課長・学務課長の兼務）への昇進、その翌年1880年（明治13年）には勸業学務課長に加えて神戸師範学校・模範中学校の校長兼務と、一人で四つの要職を兼務していた。

1882年（明治15年）には兵庫県を退職し、大阪新報社に移り、新聞社の経営に携わるようになる。次いで藤田組支配人・大阪毎日新聞社相談役に就き実業家・新聞人としての道を歩んでいく。

本山彦一は、幼少期より学び、請われて或い

は巡ってきた就業の機会を生かしている。そして、職に就きそこでも多くの知識と経験を身につけ、更に人脈を広げ、次の仕事に生かしていく過程が、成し遂げた多くの事業と業績から知ることができる。

考古学においても、東京在住中に興味を抱いた考古学について関心を持ち続けている。毎日新聞社社長に就任後、考古学・人類学・歴史学の研究者を支援するとともに「本山発掘隊（大毎考古隊）」を組織して全国の遺跡を調査し、その成果を新聞報道に生かしたことから同様の事が言えるのではないだろうか。そして、その成果が、関西大学博物館に所蔵される重要文化財2件16点、登録有形文化財 総点数18,945に及ぶ本山コレクションとなっている。

本山彦一誕生の地、熊本市と熊本城

現在の市街地は、細川氏熊本藩54万石の城下町を基礎に発展してきている。その中心である熊本城は、中央区に広がる茶臼山丘陵一帯に築かれた平山城である。地形上は、熊本市北区植木町の中程から南方に伸びている京町台地と呼ばれる舌状台地の先端部にあたる。

行政区画上での地名は、中央区本丸・二の丸・宮内・古城・古京町・千葉城町にあたり、大小天守閣をはじめ、櫓49、櫓門18、城門29を数え、城郭の広さは約98ha（東京ドーム21個分）、周囲約5.3kmに及ぶ。

現在の大小の天守閣は、1960年（昭和35年）に、総工費1億8,000万円をかけて建築されている。鉄筋コンクリート造りで、外観が復元されている。復元にあたっては多くの市民が協力し、寄付をおこなって建てられた。天守台の標高は



写真4 熊本市立碩台小学校



写真5 熊本城大天守・小天守

50mを測る。大天守は外観3層内部6階地下1階、小天守（3重4階地下1階）は大天守建築後に増築され、景観を考慮し西にずらして建てられている。

1871年（明治4年）に開講した熊本洋学校へ招聘されたアメリカ人L. L. ジェーンズ（リロイ・ランシング・ジェーンズ）教師は、西南戦争で焼け落ちる前、明治初年、天守に登っている。

彼は、天守のことを「巨大な中世の武器庫である」と書き残しており、内部は戦闘に備え、各種の武器を備えるための部屋割りとなっていたようである。

熊本城の所在地には、中世に肥後国守護菊池氏の一族である出田氏により千葉城が、後には鹿子木氏により隈本城が築かれた。安土桃山時代末期から江戸時代初期にかけて加藤清正が肥後国（北半国）の領主となった後、これを取り込んで築城をおこなった。細川氏に変わってからも築城が続けられ、現在のような姿に繋がる熊本城が築かれていく。

日本三名城の一つとされる。「清正流（せい



写真6 熊本城大天守より西側市街地を望む



写真7 熊本城東十八間櫓（重要文化財）



写真8 熊本県立近代美術館分館・永青文庫展示室

しょうりゅう)」と呼ばれる石垣が築かれ、そこに造成された台地の上に御殿、大小天守、五階櫓などが、密集したように建てられ、一大名の城としては「日本一」とあるとの評価もある。

なお、城域は国の特別史跡に指定され、城内には重要文化財に指定されている建造物が13棟（長堀1・櫓11・門1）ある。

写真の東十八間櫓は、熊本城本丸内東竹の丸にある9件の重要文化財建造物（櫓8・門1）の1件である。この櫓の名称は、その大きさから名付けられたもので、長さ十八間を測る。熊本城における長さの単位は、「一間」・6尺5寸＝約197cm。その他、管理していた人名に基づくもの「源乃進櫓」「宇土櫓」、立っている方角によるもの「戌亥櫓」「未申櫓」、収納していた木製の容器の名前がついた「田子櫓」などがある。

熊本城の周囲には旧細川刑部邸（熊本県重要文化財）、護国神社、熊本大神宮、熊本稲荷神社、熊本県立美術館、永青文庫展示室、熊本県立美術館分館、熊本県伝統工芸館、熊本市立博物館、熊本市立美術館、歴史文化体験施設（湧々座）などがある。

探訪コースが整備されるなど、市民の憩いの場所として、また、熊本における文化と観光の一つの拠点にもなっている。

参考文献

佐藤英達「大阪毎日新聞社社長・藤田組支配人としての本山彦一論」実践経営学会関西支部会『関西実践経営』第29号 2005年

関西大学と盾塚・鞍塚・珠金塚古墳

藤 井 陽 輔

1. 盾塚・鞍塚・珠金塚古墳

大阪府藤井寺市・羽曳野市には古市古墳群が所在する。堺市に所在する百舌鳥古墳群と双壁をなす巨大古墳群であり、どちらも古墳時代中期を代表する古墳群といえよう。

昭和30(1955)年、誉田御廟山古墳(伝応神天皇陵)に近い道明寺町において、住宅建設が計画された。工事計画範囲内には3基の古墳が所在し、破壊を待つばかりであったが、幸いなことに末永雅雄先生(当時関西大学文学部教授)の指導のもと事前に調査される運びとなった。現地調査は北野耕平氏(後大阪大学助手、神戸商船大学教授)が担当し、関西大学の学生を中心とする諸氏によって、約半年間の調査がおこなわれた。調査の結果、3基の古墳からは武器・武具を中心に多種多様な副葬品が出土し、後述する特色のある副葬品から「盾塚古墳」、「鞍塚古墳」、「珠金塚古墳」と名付けられた。また、3基の古墳は古市古墳群中の最大の古墳である誉田御廟山古墳から北東150m前後に占地することから、調査当初は誉田御廟山古墳の陪塚として認識されていたようである。

それでは3基の古墳を築造年代順に紹介する。盾塚古墳は古墳時代中期初頭に築造された古墳で、3基の中で最も大きい全長64m(後に73mに改められた)の帆立貝形古墳である。後円部に設けられた粘土槨からは、短甲2領、衝角付冑1鉢をはじめとする多種多様な武器・武具や、筒形銅器、鐏子状鉄器といった当時出土例の少なかった器物が数多く出土した。また、木棺を納めた粘土槨の上には11面もの盾が置かれていた。これが本古墳名の由来である。調査から約1年後の宅地工事の際には前方部にも遺構が存在することが判明した。正式な調査ができず、遺物が回収された程度であるが、立会時の記録から、人体を埋葬せず、器物の埋納に主眼を置いた施設と考えられる。

鞍塚古墳は全長約40mの円墳(後に48mの帆立形古墳に改められる)で、後円部の埋葬施

設からは、武器武具類といった盾塚古墳からの連続性を想起させられる器物のほか、鞍をはじめとする馬具一式や鉄鋌といった朝鮮半島南部からの舶載品とみられる器物が出土した。

珠金塚古墳は一辺25~27mの方墳で、墳頂部に南北2つの埋葬施設が設けられている。先行して設けられたと考えられる南槨は、被葬者2体の埋葬を復元でき、棺の内外で短甲が4領納められていたほか、武器・武具類が多く出土した。北槨からは短甲が1領出土するが、南槨に比べて武器・武具の副葬は少ない。他方で金製空玉や鉄製の針といった、女性的な要素を想起させられる器物が多く出土した。

出土した遺物はさまざまな経緯を経て、関西大学文学部考古学研究室が一括で保管する運びとなり、平成3(1991)年には報告書『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』が刊行された。これにより、同古墳は研究者の間で広く周知され、古墳時代中期、特に武器・武具、軍事研究の進展に寄与してきた。

2. 近年における研究の動向

平成3年の報告書刊行以降、大阪府教育委員会によって盾塚・鞍塚古墳が所在した周囲の発掘調査がおこなわれ、これらの古墳が当初の規模よりも大きくなることや、造出しとよばれる施設が存在していたことが明らかになった。

また、出土遺物については、いくつかの鉄製品が保存処理・修理を施され、より永年の保管が可能となった。修理に際して明らかになった新事実がさまざまな形で報告され、情報が日々蓄積されている。筆者も珠金塚北槨出土の短甲の保存修理にともなう新知見を報告した¹⁾ほか、盾塚古墳出土の頬当について、朝鮮半島からの影響を受けつつも、倭国で製作された武具であることを指摘した²⁾。

3. テーマ企画展の開催

関西大学は平成27(2015)年10月24日、31日、11月7日に、ミュージアム講座「関西大学と百舌鳥・古市古墳群」を開催した。本講座と連携するかたちで、10月24日から12月1日の間、博物館第2展示室の一角でテーマ企画展「関西大学と盾塚・鞍塚・珠金塚古墳」を開催し、関西大学文学部考古学研究室が所蔵する資料を展示した。本資料は資料保護の観点から平時は研究室収蔵庫で保管されており、恒常的な展示はされていない。関西大学博物館でまとまった展示をするのは今回が初めての試みであった。

展示スペースやケースの形状といった制約上、展示できる資料や解説パネルの数は限られていた。一方で熟覧に耐えうる特徴的な資料が多く存在している。そこで今回の展示では、シンプルだが整った印象を与え、展示資料を熟覧できる環境を作ることを目標とした。

出土資料はコンテナ150箱を越えるため、各古墳ともに特徴的かつ熟覧に耐えうる資料を6点程度選抜し、窮屈さを与えないように間隔を十分に空けて配置した。本展示に陳列した資料は以下のとおりである。

盾塚古墳…変形六獣鏡1、三角板革綴衝角付冑1、三尾鉄1、頬当1組、石釧1、筒形銅器1

鞍塚古墳…方格規矩鏡1、三角板鉄留衝角付冑1、鉄鋌1、砥石2、鏡板付轡1、後輪1

珠金塚古墳…四獣形鏡1、三角板鉄留衝角付冑1、三角板鉄留短甲1、鹿角装剣1、ガラス玉1組（以上、南槨出土）、画文帯環状乳神獣鏡1、金製空玉6（以上、北槨出土）

各古墳の解説は、概要と副葬品の出土状況を示したパネル以外を徹底的に廃した。また、解説の文字を大きくし、手前の資料の鑑賞を阻害しないように展示ケースの奥に配置した。キャプションは、個々の展示資料の解説を除き、資料名と出土古墳名のみを簡潔に表記することで、展示ケース内のキャプションの占める面積を減らすよう努めた。



珠金塚古墳南槨出土の三角板鉄留短甲

4. おわりに

今回展示した珠金塚古墳南槨出土の三角板鉄留短甲は、公益財団法人朝日新聞文化財団の2013年度の文化財保護助成を受け、2015年5月に保存修理が完了したばかりの資料であり、これまで展示に供されたことがなかった。本助成対象の基準には「修復等の事業が完了した後は、広く一般に公開することを原則とします。」とあり、今回の展示で一定の責務を果たすことができたと思う。

また、展示準備中、新たな知見を得た。今後とも継続して検討を重ねていきたい。余談だが、近年、中期古墳の出土遺物や古墳そのものの再報告・再検討が急速に進み、従来とは異なる研究見解が示されたものも多い。盾塚・鞍塚・珠金塚古墳もまとまった再報告・再検討が必要な時期にさしかかっているのではないだろうか。

最後になるが、来館者の方々に、かつて古市古墳群に特筆すべき古墳が存在したことをアピールできたと思う。展示をとおして、文化財保護に対する理解を深める一助となったこと、ひいては大阪府が目指す百舌鳥・古市古墳群の早期世界遺産登録にむけての応援になったのなら幸いである。

- 1) 藤井陽輔・米田文孝 2013「珠金塚古墳北槨出土三角板鉄留短甲の保存修理と再検討」『関西大学博物館紀要』第19号 関西大学博物館
- 2) 藤井陽輔 2016「倭国における打延式頬当の消長―盾塚古墳出土頬当の再検討―」『関西大学考古学研究室開設60周年記念考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室

◆ 博物館だより

◇平成27年度ミュージアム講座「関西大学と百舌鳥・古市古墳群」を3日間開講し、102名の方から聴講の申込みをいただきました。

10月24日「関西大学考古学研究室による百舌鳥・古市古墳群の研究史」
宮内庁書陵部 徳田誠志

10月31日「百舌鳥・古市古墳群における近年の調査成果」
堺市世界文化遺産推進室 十河良和

11月7日「百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録にかかる大阪府の取り組み」
大阪府教育委員会文化財保護課 山上 弘

◇11月8日から13日まで博物館実習展を開催しました。今年度は51名の実習生が「秋彩 紅葉と落葉の色めぐり」「地獄」「光の二百年～あかりと歩む日本人～」「旅人のすがた～江戸から昭和～」の4班に分かれ、博物館学課程の集大成として展示を構成しました。会期中には502名の方にご覧いただきました。



◇冬季企画展として北大阪ミュージアム・ネットワーク連携展「北大阪の絵画」を12月1日から1月16日まで開催しました。淀川の右岸、北大阪の地域に残された絵画を10館園等が出品・展示し、来場者は774名でした。1月12日には、シンポジウム「北大阪の絵画をめぐって」が開催され、85名の方が参加されました。



◇2月16日から25日まで「関西大学と村野藤吾展」を開催しました。建築家・村野藤吾がライフワークとして建設した関西大学の学舎群を、村野の設計図と写真家・多比良敏雄の写真、画家・松浦莫章の絵画から振り返りました。328名の方にご覧いただきました。

◇本年度下半期に本館へ寄贈いただいた資料を紹介します。設計事務所イズエの出江潤氏及び磯久五郎氏、株式会社浪忠奥井利貞氏より自立式展示パネルと陳列棚、本学校友で友禅染匠小島信治氏から手書き京友禅の作品を貼り込んだ利休屏風他39点、本学校友の遠山慶一氏から狩野永岳『瀧』、さらに本学校友木原義浩・富美子ご夫妻から、インド古代遺跡で画家・津谷鹿市氏が採拓した拓本200件202点の寄贈がありました。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。

．．． 編集後記 ．．．

表紙は、今年の干支にちなんで、本館収蔵の民芸品「木葉猿」3体（収集地肥後、現在熊本県）です。型を使わず指先だけで粘土をひねって作り、素焼きの荒いタッチの素朴さと、とぼけた味の玩具です。悪病・災難除け、子孫繁栄などのお守りとして用いられています。

関西大学創立130周年記念事業の一環として平成28年度 春季企画展「なごみのガラスー坂崎幸之助 和ガラスコレクションー」を4月1日から6月30日まで開催します。和ガラスコレクター坂崎幸之助氏が収集したコップやプレス皿、ウランガラスなどの「かわいい」和ガラスや、本館が収蔵する江戸時代のガラス資料を展示いたします。

